

「私と和歌山」

趙 偉博

教育学部 交換留学生 中国

日本を想像するとき、東京を想像している。桜、神社、火山——中国と一衣帯水の国で、人々の礼儀正しさは呼吸するように自然だ。人々が見る日本は往々にしてこういうものだ。昼間は道を通り交う人波が絶えず、孤独と抑圧が影のように付きまとい、夜になればネオンが五色に輝き、この世の栄華を表しているようだ。



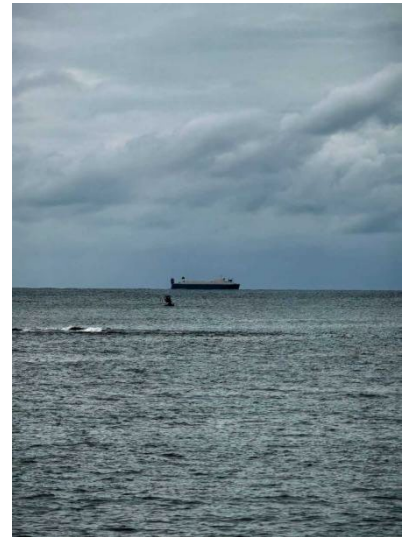
バスの中で目が覚めると、窓ガラスをすべる雨粒を見ていた。和歌山は雨だった。窓の外には六月の和歌山の海が広がり、波が岩礁に打ち寄せ、白い飛沫となって碎ける。窓には雨粒がびっしりと張り付き、湿った空気がどんよりとした空と果てしない海岸線の道をぼんやりと霞ませ、ゆっくりと流れる絵画のようだ。この日は国際交流活動で、白浜へ行くことになった。その帰り道、活動を終えてバスに乗り、それぞれが感想を話し終えると、車内は眠たげな静けさに包まれた。トンネルをいくつか抜けたところで私はようやく完全に目が覚めた。ざわめく雨音の中、深い眠りについている者もいれば、中国人の先輩留学生数人が先生と談笑していた。私は体を横に向けて窓の外を眺め、ふと二ヶ月前、自分が日本に来たばかりのことを思い出した。

一方には連なる緑の山々、もう一方には静かな海。世界はまるで何かに洗われたように清らかで、和歌山は日本の海岸線の片隅にそうして静かに佇んでいた。初めて和歌山を訪れた時、私たちは電車を間違えてしまった。乗り換えを待つ間、海風が吹き抜けるホームで、夕焼けに染まる空の雲や、一戸建ての家々と舞い落ちる桜の花びらが静寂に包まれていく様子を眺めていた。ここは一体どのような場所なのだろう。人々が思い描く日本のイメージを思い返した。ビルが立ち並ぶ都市、混雑する地下鉄、日本人は社会を一台の精密な機械のように組み上げている——そう聞いていた。しかし、私が目にしたのは、黄昏時に金色の陽光が波間に反射して電車の車内に差し込む光景や、荷物の多い私たちに会釈して道を譲ってくれる人々の姿だった。その時、また一群の学生たちが車内に飛び込んできて、その青春の姿に、高校時代の自分を思い出した。

バスが再びトンネルに入り、車が水をはじく音が響いた。トンネルを抜けると、道の両脇には雲に包まれた青い山々がそびえ立っていた。かつて寮の隣の部屋に住んでいた留学生のリョウさんと二人で、ふと思い立って自転車で大阪まで行ったことを思い出させた。あの時もこんな深い山々を抜け、



海沿いにどこまでも走った。背後には延々と続く海岸線と生い茂る森。住宅街の塀の隙間をカニが這い、柴犬とお年寄りが木陰を散歩していた。リョウさんと私は潮風に吹かれながら、ゆっくりとペダルを漕ぎ、電車が来れば止まって写真を撮り、公園を見つければ中に入ってブランコに揺られた。海岸線を走りながら、私はずっと海を眺めていた。初めて山を見た時、初めて海を見た時のことを思い出しながら、あらためて人間は自然の前ではこんなにも小さいのだと実感した。地球が宇宙の中の塵一粒に過ぎないように。人間社会の中にいると社会について考え続けるが、自然の前に立つと、自分自身について深く考えずにはいられない。自然は十分に静かだから、自分の全てがその静寂の前に曝され、隠しようがない。自然は人々の考えに微動だにせず、ただ黙って人々のあらゆる行為を見つめ続ける。その静けさ、その偉大な力、その本質を保ちながら。そして、あの時、私は電車のホームで考えていた問いをもう一度思い出した。ここは一体どんな場所なのだろう。



バスは波の音が次第に遠ざかり、雨音はますます小さくなっていく。窓の外には、夕暮れの風に揺れる木々だけが残っている。バスはもうすぐ市街地に入ろうとしていた。道で犬の散歩をするお婆さんが犬と一緒に会釈してくれたこと、コンビニの店員が私の不自由な日本語を辛抱強く聞いてくれたこと、学校の先生が親戚のように生活の世話をしてくれたこと、部活の先輩が少しずつ丁寧に指導してくれたこと―私はそんなことを思い出していた。

「日本を離れる時、日本はあなたから離れない」という言葉がかつて耳にしたことがある。日本を訪れたことのある誰もが、心に小さな日本を抱えている。私にとっても、心の中に小さな和歌山ができたようだ。和歌山がどのような場所かということは、もう重要ではない。和歌山はどのような形容詞も必要としない。和歌山はただの和歌山であり、誰かに定義される必要などない。この街にはこの街のリズムがあり、この街の思考があり、この街の優しさがある。そして私がこの街で得た体験こそが、私の中の和歌山なのだ。

和歌山は、ここに溶け込もうとするすべての人に、自らを考えさせ、自らを知らしめ、経験を重ねる中でより良い自分へと導く。それこそが和歌山の魅力であり、和歌山に留学することの魅力だと私は考える。留学生である私たちは、和歌山で異なる国々の人々と出会い、理解し合い、互いに学び、共に成長し、限りない経験の中で新しい自分と出会う。それが留学の意味であり、和歌山が私たちに与えてくれる意味なのだ。

和歌山は私に教えてくれた。歳月に文明を与えよ、文明に歳月を与えるのではなく。いつか私は和歌山を離れる日が来るだろう。しかし、和歌山は私から離れないと信じている。和歌山は永遠に私と共にあり、私の人生の永遠の一部となるだろう。

これが和歌山だ。私の過去と未来が共に過ごした場所。

我与和歌山

赵伟博

教育学部 交换留学生 中国

人们常常会像设想东京那样去设想日本。樱花，神社，火山，在一片与中国一衣带水的土地上，人与人的礼貌如呼吸一样自然。人们眼中的日本往往就是这样，白天街头人来人往川流不息，孤独与压抑如影随形，夜晚霓虹灯五彩缤纷，世界纸醉金迷宛如一摊泡影。

我从在大巴车上醒过来，看着雨滴从窗户上滑落。和歌山在下雨。窗外是和歌山六月的大海，海浪拍在礁石上粉碎成白色的浪花。车窗上雨滴密密麻麻，水汽将阴沉的天空与漫长的海岸公路朦胧成一副缓缓流动的图画。这一天是国际交流课组织的一次郊游活动，在活动结束后的返程上，我侧过身子看着窗外，忽然发觉就在两个月前，我正刚刚来到日本。

一面是连绵的青山，一面是静谧的大海，世界干净得如同被什么洗过，和歌山就这样安静地伫立在日本海岸线的一个角落。初到和歌山，我们坐错了电车。等待换乘时，我在海风拂过的站台上望着天边被夕阳晕染的云彩，望着一座座一户建与点点落樱一起被卷入安静的氛围。我开始想这里究竟是怎样的一个地方。

大巴车又一次开进隧道里，雨声忽然变得粗犷。等到开出隧道时，道路两旁已经耸立着云雾缭绕的青山。我曾经和住在宿舍隔壁的台湾留学生廖一起，一时兴起骑着自行车，从宿舍向大阪出发。一路上我们穿过的也是这样的深山，随后沿着大海向远方骑去，身后是绵延的海岸线与一片片茂密的树林。当我沿着海岸线骑行的时候，我就边骑边注视着大海。我想起我第一次见到山，见到海的时候。那时我认识到人在自然面前是如此渺小，就像地球在宇宙面前不过一粒尘埃一样。人在人类社会会不断地思考社会，而在自然面前就会不由得深深地思考自己。因为自然足够安静，你的一切在这样的安静面前全部暴露无遗，他不会因为你的想法产生一点涟漪，他只会静静地在那里凝视着你的所作所为，他保持着他的安静，他的伟力，他的本质。我在那时突然想到我曾经在电车站台思考过的问题，这里究竟是怎样的一个地方？

我曾听过一句话，当你离开日本时，日本不会离开你。每一个来过日本的人心里，都会有一个小小的日本。对我来说，我的心中似乎也有了一个小小的和歌山。和歌山是怎样的其实已经不再重要。和歌山不需要任何的形容词，和歌山就是和歌山，他不需要任何人对他进行怎样的定义，这座城市有他自己的节奏，自己的思考，自己的温柔，而我对这座城市的体验，就成了我心中的和歌山。和歌山让每一个试图融入到这里的人思考自己，认识自己，在不断的经历之中成就更好的自己，我认为这就是和歌山的魅力所在，也是留学的魅力所在。

我终有一天会离开和歌山，但我相信和歌山不会离开我。和歌山将会永远与我同在，直到它成为我生命中永恒的一部分。

这就是和歌山，我的曾经和我的未来一起生活过的地方。